

子どもと大人のこころを理解するための精神病理学

京都大学大学院 人間・環境学研究科 准教授 松本 卓也

精神病理学とは、精神疾患をもつ人々のこころを「理解」するための学問である。ただし、ここでいう「理解」とは、ヤスパースが述べた「了解」（に端を発するもの）のことであり、「うつ状態とはセロトニンなどの脳内伝達物質が不足している状態である」といったような客観的・科学的な説明によって「理解」することではない。

「了解」とは、精神疾患をもつ人との対話から、治療者がその人の心的体験を自分の心のなかに写し取り、共体験することによって初めて可能になる。言葉で書くといっけん簡単そうに見えるが、実際にやるとなると意外に難しく、特にカルテ記載や診断基準や治療方針のことなどを考えながらこれをやるためには十分な熟練を要する。また、「了解」は安易な仕方では「わかる」ことではなく、相手の心のなかにどうしてもわかりえない部分があることを大事にしながら行うことも重要である。

精神病理学を学ぶ意義のひとつは、この「了解」を上手に行うことができるようになることにある。たとえば、ある人がいっけん不可解であるとか奇妙に思える言動をしているとする。しかし、どうしてそういうことが起こっているのかを私たちは「了解」することができる。もちろん、そのときには常識的な考えだけを参照してはいけな。ときには、哲学や思想の知恵を少し借りながら、自分がこれまで蓄積してきた常識的な経験を少々拡張して「了解」を試みる必要がある。精神病理学が種々の哲学に範を求めてきたのはそれゆえである。

このような「了解」は、治療やケアを行う

人にとって重要な理解を提供してくれるとともに、その患者さんに関わる周囲の人を「楽にする」。また、治療やケアをされる側の患者さんも楽にすることがある。なぜなら、多くの場合、患者さんは自分の経験をこれまで他人にあまり理解されてなかったという経験をもっているからである。そのような「了解」にもとづく実践をつづけていくことは、それ自体が治療的であり、実際に（自閉症スペクトラムや認知症のケースにおいては）問題行動を減らすことにもつながっていく。

本講演では、以上のような導入のあと、認知症と自閉症スペクトラムの具体的な症例をとりあげて、その精神病理学的な理解について説明した。

認知症については、嫉妬妄想や物盗られ妄想の成立の背景には、認知機能が減退していくなかで「自分がしっかりした一人前の大人でありたい」という気持ちがあり、それに駆動されて取り繕いや妄想の形成が生じることを示した。その際に、哲学者アンリ・ベルクソンの『道徳と宗教の二源泉』における宗教についての議論を参照し、彼のいう死の不安に対する確信の仮構が、認知症の患者さんが確信する妄想にもあてはまることを論じた。

つづいて、自閉症の症例について、特にタイムスリップ現象をとりあげ、これを哲学者ジル・ドゥルーズの『意味の論理学』における出来事概念をもとに論じた。

なお、本講演や講演内で取り扱った症例は、拙著『症例でわかる精神病理学』（誠信書房、2018年）のなかから取られたものであるため、詳細はそちらを参照してほしい。